

「茗飲」から「品茗」へ ——古代中国の「飲茶」諸概念の発展史に関する考察——

林 美 茂
赵 子 涵

飲み物としての「茶」は古代中国においてはじまった。文献によると、少なくとも漢代の『僮約』という文献には茶を煎じて飲む記載がある。飲食文化として、中国の飲茶文化が唐代での濫觴から清代にいたるまで、飲茶をめぐる様々な概念が現れた。最初の「茗飲」から後の所謂「品茗」に至るまで、歴史の中でかなり長い時間をかけて発展したのである。この中で、人々が最もよく使ったのは「茗飲」「啜茶」「品茶」「品茗」の四つである。この四つの概念が使われた時代、状況、意味等は完全に一致するものではない。これらの概念の発展史から、茶文化が様々な時代においてどのように展開してきたのかがわかり、古代中国における茶の飲用の歴史が導き出される。本稿は上述の問題に関して、文献の歴史考証を行い、中国茶文化における「茗飲」から「品茗」への発展の流れを整理していきたい。

一、茶と茗

周知のように、古代中国では「茶」に関していくつの文字があり、一般的には「茶」が最初に現れたのは唐代であると考えられている。

『茶経・一之源』に曰く、

茶は……其の字、或いは草に従い、或いは木に従い、或いは草木を并す。草に従えば当に「茶」に作るべし、其の字『開元文字音義』に出ず。木に従えば、当に「櫟」に作るべし、其の字『本草』より出ず。草木を并すれば、「茶」に作る、其の字『爾雅』より出ず。

其の名、一に茶と曰い、二に檟と曰い、三に藪と曰い、四に茗と曰い、五に蒨と曰う。周公は「檟は、苦茶なり」と云う。揚執戟は「蜀西南の人 茶を謂いて藪と曰う」と云う。郭弘農は「早く取るを茶と為し、晩く取るを茗と為す、或いは一に蒨と曰うのみ」と云う¹⁾。

上述した『茶経』の「茶」に関する命名と記載は、後世において「茶」の最も基本的な文献となった。これらのことから、古代においては「茶」の別名が少なくとも六つ、即ち

「茶、檟、檟、葑、茗、莽」があることがわかる。それが時代が下るにしたがって、「茶」と「茗」の二つだけが残り、今も使われている²⁾。

しかし、ここでは「茶」と「茗」の字の使用の歴史について、いくつか明確にしておく必要がある。

第一に、「茶」という字の起源についてである。郝懿行が注釈した『爾雅』の記載によれば、「今の茶の字、古は荼に作る……唐の陸羽『茶経』を著わすに至りて、始めて一画を減じて「茶」に作る³⁾という。しかしながら、上述した『茶経』の「其の字『開元文字音義』に不出」という記述から判断すれば、この説は正確ではなさそうである。沈冬梅『茶経校注』の注・十五によれば、『開元文字音義』は唐玄宗の開元二十三年（735年）編成された字書であり、この中にすでに「茶」の字が収められている⁴⁾。『茶経』はおよそ西暦758～761年の間に（その頃は『茶論』として）完成しており⁵⁾、『茶経』が出る25年ほど前に、唐代で既に「茶」という用語が出現していたことになる。しかし一方、南宋の魏了翁『邛州先茶記』においては郝懿行と同じく、「惟だ陸羽『茶経』、蘆仝「茶歌」、趙贊の茶禁より以後、則ち遂に茶を荼と為すに易わる⁶⁾とある。このように、「茶」の字は陸羽から用いられはじめたというのが、中国茶文化史において一般的である。しかし、沈冬梅の説も、『開元文字音義』が『茶経』よりも古いということからすれば、決して無視できるものではない。諸説あるにせよ、おおよそ「茶」の字が唐代に出現したという点においては一致している。しかし、まだいくつか重要な文献がある。唐代以前の文献の中で、既に「茶」の字を用いた記載があるようなのだ。三国時代の呉の陸璣『毛詩草木鳥獸虫魚疏』巻上に「椒樹、茱萸に似たり……蜀人、茶を作り、呉人、茗を作るに、皆な合わせて其の葉を煮て以て香と為す⁷⁾とあれば、『三国志・呉書・韋曜伝』には「曜、素より飲酒二升を過ぎず、初め礼異せらるる時、常に裁減せしめ、或いは密かに茶莽を賜わり以て酒に当てる⁸⁾ともある。これらの文献から、唐代以前に既に「茶」の字が使われはじめていたことがわかる。もちろん、これらの文献は宋代以降の刻本であるため、「荼」が「茶」に改められたのかもしれないが、もしこの文献が事実在即するならば、「茶」の字は唐代以前から、少なくとも『開元文字音義』以前から存在していたことになる。要するに、古代中国における「茶」の字の時期的起源は明確ではない。ただ、唐代に入って中国茶文化が興り、陸羽の『茶経』が伝わった影響で、この字が広く使われ始めたのである。

第二に、「茗」の字と「茶」の関係に関する問題である。上述の『茶経』に引用した郭弘农の「早く取るを茶と為し、晩く取るを茗と為す」という言葉は、茶を摘む時期の前後によって名前が違うことを表している。しかし、陸璣『毛詩草木鳥獸虫魚疏』の「蜀人、茶を作り、呉人、茗を作る」では、地域の違いによって異なる名称が生まれることを示している。両者には、「茗」と「茶」の関係に対して明らかに解釈の違いがある。この他に、北宋の徐鉉が注釈した『説文』においては、「茗」を「茶の芽」とする新しい認識が記されている。また、『茶経・七之事』では、何度も「茗」について語られており、注目すべきであろう。

まず、最も有名な、「茗」の発見に関する二つの物語がある。

(1)『神異記』には「余姚人の虞洪 山に入りて茗を採り、一道士の三青牛を牽くに遇い、洪を引きて瀑布山に至り、曰く、吾れ、丹丘子なり。子善く飲を具うと聞き、常に恵まれんことを思う。山中に大茗有り、以て相い給うべし。子に祈る、他日甌犧の余有りて、相い遣乞うなり」と。因りて奠祀を立て、後に常に家人をして山に入らせしめば、大茗を獲る」⁹⁾とある。

(2)『続搜神記』には「晋、武帝の世、宣城人の秦精、常に武昌山に入りて茗を採る。一毛人、長丈余に遇い、精を引きて山下に至り、叢茗を以て示して去る。俄かにして復た還り、乃ち懐中の橘を採り以て精に遣る。精怖れて、茗を負いて帰る」とある¹⁰⁾。

この二つの物語は、ともに当時の人が「茗」を発見した伝説であり、志怪小説の文献に載っている。この二つの文献が晋代の人の手によることから、「茶」の命名が広まる以前は、「茗」が広まっていたのであろうと考えられる。次に、文献中に「茶」と「茗」が「茶茗」という一つの単語として使われていることである。例えば、『茶経・七之事』には次の四つの記述がある。『神農食経』に「茶茗久しく服せば、人をして力有り、志を悦ばしむ」と¹¹⁾、『宋録』に「新安王子鸞、豫章王子尚、曇濟道人を八公山に詣で、道人茶茗を設け、子尚之を味わいて曰く、此れ甘露なり、何ぞ茶茗と言うか」と¹²⁾、『夷陵図経』に「黄牛、荊門、女観、望州等の山、茶茗を出ず」と¹³⁾、『茶陵図経』に云う「茶陵は、所謂陵谷に茶茗生ず」と¹⁴⁾等、これらでは「茶茗」の併記で表現されている。ここでの「茶茗」が文献によっては「茶茗」となっている版本もある。一般的に「茶茗」は「茶茗」であると考えられているため、現在多くの文献において『茶経』における「茶茗」を統一的に「茶茗」と校勘している。その他、『茶経・七之事』の記述の中では「茶」と「茗」を同じとしている用例もある。『世説』に「任瞻、字は育長、少き時に令名有り、江を過ぎてより志を失う。既に下飲して、人に問いて云う、此れ茶と為すか、茗と為すか、と。人に怪色有るを覚え、乃ち自ら申明して云う、向に飲の熱たるか冷たるかを問う」と¹⁵⁾である。この用例は興味深く、任瞻という人物が最初は「茶」と「茗」が違うものだと思っていたのに、周囲の人が彼の疑問に対して変な目で見たため、自分は「茶は熱して飲むのか冷やして飲むのか」を問うただ、とすぐに訂正しているのである。

第三に、『茶経』以降、「茗」を除いて「茶」と関係する他の字が、ほぼ人々に用いられなくなったことである。『茶経』以外の唐から五代までの茶の文献を見てみても、「茶」を使った表現が大多数を占め、「茗」や「茶芽」、「茗芽」は時々見られるだけであり、他のいくつかの字はほとんど使われていない。「茶」と関係する文献の内容については、ほとんどがそうになっている。また文献の名前にしても同様であり、水に関するいくつかの文献以外、主だった文献はみな「茶」の字を使った名前にしてある。例えば、『煮茶水記』（張又新）、『茶酒論』（王敷）、『茶論』（裴汶）、『采茶録』（温庭筠）、『茶譜』（毛文錫）などである。この時既に「茶」がこの植物の名称として定まっており、「茶」の字の出現と定着が唐代に始まった

と定められた理由のひとつであろうと思われる。これが陸羽の影響を受けた結果であることは明らかであり、『茶経』によって「茶」が命名されたということが定められたのである。まさにこのことと呼応するように、飲茶に関する叙述の中で、二つの表現がよく見られるようになった。それは「茗飲」と「茶飲」である。「茗飲」の使用回数は「茶飲」よりも多い。これはなかなか興味深いことである。唐の文献からすると、「茗」と「茶」の意味が同じであるため、唐の人々からすれば両者はただ通称と名前といった関係でしかなかったのだろうか？ 実際は知るよしもない。例えば、敦煌から出土した唐代中後期の王敷『茶酒論』の記載には、「茶は……百草の首、万木の花なり。之を貴びて蕊を取り、之を重んじて芽を摘む。之を茗草と呼び、之を号して茶となす」¹⁶⁾とある。ここでは、「茗草」が呼称として学名に属し、「茶」は号である。唐の人が優雅さを大事にすることからすると、「茗飲」が「茶飲」よりも審美性を備えていたのかもしれない。いずれにせよ、こうした現象が唐代の文献中にあるということは注意すべきである。

以上の内容を整理すると、唐代において茶と茗はともに茶を表していたことが分かる。当時は他にも「檟」「荼」「舜」といった表現があるにはあったが、最も用いられたのは「茶」と「茗」の二つであった。現在のいわゆる飲茶については、「茗飲」「茶飲」の二つが出てきており、「茗飲」を使うのが明らかに多いのもひとつの傾向である（唐末のひとつの文献には「品茶」の表現が出てくるが、文学的用語であり、それについては後述する）。

二、「啜茶」と「茗飲」

以上、「茶」と「茗」に対する基本的認識ができた。次に、古代において茶を飲むことに対してどのような言葉で表現していたのかを探っていききたい。結論から述べると、唐から明にかけて、茶の文献において「茶を飲む」という箇所ですでに使われる単語は、主に「茗飲」「啜茶」そして「品茶」であった。清代に入ると、文献中にこうした表現が引き続き使われて、特に「茗飲」と「品茶」が最も多いが、「啜茶」は清代にほとんど見られなくなり、代わりに「品茗」という新しい表現が出現した¹⁷⁾。

『中国古代茶書集成』に収集整理された文献¹⁸⁾によると、唐から五代における茶文化に関する文献には、主に『茶経』、『顧渚山記』、『水品』（陸羽）、『煎茶水記』（張又新）、『十六湯品』（蘇廙）、『茶酒論』（王敷）、『茶論』（裴汶）、『采茶録』（温庭筠）、『茶譜』（毛文錫）等がある。これらの文献の中で、まず陸羽の『茶経』、『顧渚山記』、『水品』においては、飲茶を表現するのに六つの動詞、「飲」、「啜」、「食」、「服」、「爵」、「味」があり、現在口語でよく使われている「喝」を「飲」で表すのが大半を占めている。それは『茶経』のなかに特に「六之飲」という項目があるところにも見てとれる。『茶経』において「飲」は32回出てくるが、そのうち27回は茶と関係する。「飲」の次に多いのは「啜」であるが、それには2種類の状況しかなく、ひとつは動詞単独での使われ方で、「半を啜りて味寡なし」、「啜れば苦く咽めば甘きが、茶なり」とある¹⁹⁾。もうひとつは、「飲」との併用であり、「飲啜」という

形で表現する。例えば「もし冷めれば、すなわち精英氣に随いて竭き、飲み啜りて消えざるは亦た然り」²⁰⁾等とある。その他の人の文献を縦覧すると、茶を飲むところで使われている動詞は、やはり「飲」、「吃」、「服」、「啜」などであり、一つの単語で表しているものとしては「茶飲」と「茗飲」があった。しかしその後、「茶飲」の表現は次第になくなり、特に明代に入ると、時折「飲茶」は出てくるものの、基本的に「茶飲」は使われなくなり、一方で「茗飲」は清代に入っても引き続き茶の文献の中でよく見られるようになる。

茶を飲む意味の「飲」を「啜」の字で表現したのは、上述した陸羽の『茶経』にある「啜れば苦く咽めば甘きが、茶なり」が最初である。五代の蜀の人、毛文錫の『茶譜』はこの表現を踏襲し、「湘人、四月を以て楊桐草を摘み、其の汁を掬り、米を拌せて蒸す、猶お蒸麩の類の、必ず此の茶を啜るがときは、乃ち其の風なり。尤も宜しく暑月に之を飲むべし」²¹⁾と述べている。「啜」を用いて現代で所謂「喝茶」の「喝」や「飲茶」の「飲」を表すのは、古代においてはわりと一般的なことだったようだ。唐や五代がそうである以外に、宋代以後においても「飲」の字が時々現れはするものの、「啜」の字のほうが多く見られる。例えば、陶穀は『茗荈録・水豹囊』で「茶を煮て之を啜る、以て滯思を滌いて清風起るべし」²²⁾と言い、趙佶の『大觀茶論』には「英を啜り華を咀み、篋笥の精を較べ、鑑裁の妙を争う」²³⁾とあり、謝宗の『論茶』にも「昏俗塵勞、一啜りして散ず」²⁴⁾とある。ここで注意すべきは、「啜」が「飲」を表すときには往々にして文学的意味が強く、審美的な文章表現において表れるということである。宋代の文学作品において特に著名な王安石の詩『平甫に茶を寄る』には、「碧月团团として九天より墮つ、封題して洛中の仙に寄す。石樓水を試みて宜しく頻りに啜るべし、金谷花を看て漫りに煎ることなかれ」²⁵⁾とある。また朱熹『晦庵集』に収められた吟茶詩『茶坂』（或いは「雲谷茶坂」、雲谷二十六詠のひとつ）には、「簾を携える北嶺の西、采擷茗飲に供す。一啜夜窓寒し、跣趺衾枕を謝す」²⁶⁾とある。そして朱熹や上述した謝宗の「一啜」という表現は、明代の詩人に直接影響を与えた。明代に至ると、多くの文献が「啜」の字で茶の「飲」や「喝」を表現した。このとき、「茗飲」といった伝統的表現以外には、「茶飲」という二字の単語はほとんど出なくなり、時折「飲茶」が見られるものの多くはなく、これに代わって「啜茶」や「品茶」が頻出する。このほか、「品水」「品泉」等の言い方も多く現れ始めた。これは、明代の茶の「品真」（真を味わう）を追求するという考えが関係していると思われる。例えば、陸樹生『茶寮記』には「茶口に入りては、先ず灌漱し、須らく徐に啜るべし。甘きを俟ちて舌を津し潮せば、則ち真味を得る、他果雑じれば、則ち香味俱に奪わる」²⁷⁾とある。また、文学作品の中では、「啜」の字で飲茶を表すことが際立つ。楊万里の『木舎人韞之講筵茶の送るに謝す』では「老夫七碗病未だ能わず、一啜りして猶お秋夕に坐するに堪えたるがごとし」²⁸⁾、梅堯臣『建州沈屯田新茶寄るに答す』では「一啜りて醉翁と同じくし、君を思いて聊か引領す」²⁹⁾等とある。

以上は、茶を飲むことを「啜」一文字の動詞で表したことについてであったが、唐代以降、すでに「啜茶」という二字の単語も比較的出現し始めていた。唐時代の積皎然や顔真卿

らの『月夜啜茶聯句』の詩³⁰、また釈靈澈の『唐四僧詩』にある常達詩句「茶を啜りて好水を思い、月に対して諸峰を数う」³¹等には「啜茶」の文学的表現が見られる。宋代においては、今のところ「啜茶」の表現を茶文化と関係する文献中に未だ見出していないが、二程、陸遊、蘇東坡、司馬光、朱熹ら文人雅士の詩の中に、「啜茶」の用例が見られる³²。そして明代に至ると、茶の文献に「啜茶」が多く登場する。朱権の『茶譜』には、「然而して茶を啜り、大いに白丁を忌む、故に山谷曰く：‘茶を著けるは須らく是れ吃茶の人なるべし’」³³とあり、また趙観が田芸衡『煮泉小品』に書いた「叙」の中にも、「固より嘗て泉を飲み爽を覚え、茶を啜りて喧きを忘るるは、膏粱紈綺に非ざればと語るべと謂う」³⁴といった内容があり、この文献の本文中にも「啜茶」の用例が見られる。

以上の内容からして、古代中国では、「飲茶」やいわゆる「喝茶」として後世で使われている動詞に関して、習慣的に或いはとりわけ「啜」の字を好んで用いていたようである。その原因はおそらく、人々が茶を飲む目的と関係があったと思われる。茶が飲料としてただ喉の渇きをなくすだけであれば、「飲」や「喝」で問題はない。しかし、茶を飲むことは雅やかさを追求する飲食文化の営みであり、物質的な意味だけでなく、それを超えた精神的な追求がある。まさに田芸衡の『煮泉小品』には「之を飲む者は一吸いして尽き、味を辨じる暇あらず、俗より甚だしきことなし」³⁵と述べている。俗を脱し茶の本当の味を楽しみ、茶の優劣を識別するのであれば、大口で牛のように飲むわけにはいかない。ゆっくり少しずつ啜って味わう必要がある。「啜」は口をすぼめて微かに吸う動作である。口を大きくあける「飲」や「喝」とは反対であり、この飲み方が「品茶」の「品」という範疇に入る。所謂「大口を飲と為し、小口を品と為す」である。「啜茶」の飲み方は、喉の渇きを潤すためではなく、茶の本当の味を味わうためのものである。まさにこのため、中国茶文化は茶を飲むときに「品茶」と表現するようになっていった。では、「茗飲」はどうであったのだろうか？

学界で見られる茶に関する諸文献を調べたところ、「茗飲」が最初に登場するのは、南朝の宋の劉敬叔による志怪小説『異苑』巻七「剡県陳務が妻、少くして二子と寡居す、好みて茶茗を飲む。宅中に先ず古塚有り、毎日茗飲を作るに、先ず輒ち之を祀る」³⁶においてである。この内容は後に茶の文献の中で多く引用された。この他にも、北魏の楊衒之著『洛陽珈藍記』の「劉縞、王肅の風を慕い、専ら茗飲を習う」³⁷もある。唐代に入り、陸羽の『茶経・七之事』においても、「茗飲を煮んと欲せば、先ず灸して赤色にせしむ」、また『顧渚山記』にも「子善く茗飲と聞き、常に恵まれんことを思う」³⁸のように「茗飲」が出てくる。ここでの「茗飲」は「茶」としての意味に解されるものばかりであるが、文脈の上で考えると、やはり茶を飲むという意味を持っている。しかし、注意しなければならないのは、「茗飲」という言葉で茶を飲むことを表現したときに、茶は物質的な意義が強く、精神的な追求はほとんど見られないということである。上述した茶の真味を味わう「啜茶」との間には区別がある。

宋代には、前述した朱熹の茶詩以外にも、葉清臣の『述煮茶泉品』の中で、「昔、酈元

『水経』を善くすれども、而して未だ嘗て茶を知らず。王肅は茗飲に癖あれども、而して水表を言うに及ばず、是れ二美にして吾れ愧じること無し³⁹⁾とあり、さらに趙佶の『大観茶論』では「薦紳の士、韋布の流、沐浴膏沢、薰陶徳化、咸な雅尚を以て相い推し、茗飲に従事す⁴⁰⁾、魏了翁の『邛州先茶記』には蘇軾の『大治長老桃花茶乞うて東坡に栽すを問う』の詩「周の詩に苦茶と記す、茗飲は近世に出ず⁴¹⁾」が載っている。明代もやはり同様で、真清の『水辨』「付録」の魯彭『刻茶経叙』が陸羽の意義や貢献を「厥後、茗飲の風中外に行なわれ、回紇亦た馬を以て茶に易え、宋より今まで、大いに遍く助けと為れば、則ち羽の功、固より万世に在り、仕と不仕、奚くんぞ論ずるに足らんや⁴²⁾」と評価し、程百二編選の『品茶要録補』では「茗飲」に一項目を割り当てて紹介している。「茗飲酪奴」という節では王肅の「茗飲蕪羹が好み」を紹介し、「茗飲」の項では『謝幼槃』の詩句「高情吾が党に属す、茗飲安くんぞ忘るるべけんや⁴³⁾」を挙げている。こういったことは、清代に増補修訂のうえ出版された明の黄履道の『茶苑』においてさらに顕著である。この文献の十三巻、十四巻、十五巻、十九巻等に「茗飲」「茗飲譚経史」「茗飲愈脳疾」等の名称が出現し、そのうち第一巻に収められた『広州志』と『西平県志』には「南人は以て茗飲と為し」、「葉を採り茗飲と為す可し⁴⁴⁾」とある。このように、明代にいたると、「茗飲」が飲茶の通俗概念として広く使われた。清代の劉源長編纂の『茶史』では、序言の冒頭で「茗飲」について語られている⁴⁵⁾。陸廷燦編纂の『続茶経』においても多く用いられている。特に冒囊編纂の『芥茶匯鈔』では、前述した程百二の同様、「茗飲」を章の名前に用いて説明している。しかし、こうしたことも主に清初であって、茶文献以外の一般文献、特に文学性が強い文献において、「茗飲」が使われることは既にとても少なくなり、「品茶」という表現に徐々に取って代わられていったと考えられる。

以上のことから、「茗飲」は飲茶の用語として、中国古代における長い期間の中で常用された名詞的概念であり、「啜茶」「品茶」と同時に使われたことがわかった。しかし「啜茶」が広く使われることはなく、特に「品茶」が出現してからは二字単語としての「啜茶」は、わずかな詩文を除いては、茶文化に関する文献の中において徐々に「品茶」に取って代わられた。一方、「茗飲」は継続的に「品茶」と併存した。それが最も早く見られた南北朝において、「茗飲」は明らかに「啜茶」「品茶」よりも早く存在した。しかしながら、「茗飲」が使われた状況や範囲は、後世に出た「品茶」に比べると狭く、茶文化の中で名詞的概念として用いられる程度でしかなかった。時には、文献の章の名前となったこともあるが、結局は茶文化の範疇的概念として確立された「品茶」ほどではなかった。中国の茶文化に自覚的な「品茶」の追求が現れ、「品茶」の追求によって、茶の飲用が、元々の物質的レベルから精神的意義を備えた存在へと昇華し、茶の存在が生命的な審美の意義を獲得した。つまり、茶は喉を潤すという物質的な属性や効能を超え、味わいや本物（真）を求めるといふ審美の追求へと至ったのである。この審美の追求主体は人間であるが故、人間と茶、主と客との関係においては、人間の主体性が強まると見えたのである。

三、「品茶」と「品茗」

「品茶」と聞くと、宋代の『品茶要録』、そして明代の『品茶要録補』や『品茶八要』等の「品茶」を冠した名前の文献が思い出される。しかし、「品茶」概念が最初に出現したのは唐末の陸龜蒙『甫里集』の「楊文公談苑」においてであり、ここでは「高士を以て召すに至らず、躬自ら舂錘もて品茶評水し、流俗と交わらず……」⁴⁶⁾とある。陸龜蒙には『品茶』という著書があるようだが、それは既に失われて内容を知ることはできない⁴⁷⁾。ただ、唐代において、この文献は唯一の例であり、筆者が渉獵した文献中には同じような用例は見あたらなかった。宋代に入ると、詩文の中に「品茶」の表現が見られる。例えば、晁説之『初至鄆州感事』の詩には「屋山の阿を尚ほ喜び、双泉は鳴琴の如し。遠く桑苧翁を明らかにし、品茶して未だ湛しまざるを疑ふ……」⁴⁸⁾と書かれ、陳岩『煎茶峰』にも「緩火もて活水を烘り来りて煎り、山頭の卓錫は清泉を取る。品茶して嫩きを検べし茶経を看るに、舌は本より味禪有るに非ざるもの無し」⁴⁹⁾とある。しかし茶文化に関する文献の中で、北宋の黄儒の『品茶要録』が最も早く「品茶」を名詞として使っている。『品茶要録』は「総論、一採造過時、二白合盜時、三入雜、四蒸不熟、五過熟、六焦壺、七圧黄、八漬膏、九傷焙、十辨壑源沙溪、後論」の十二章から成る。「総論」において主に著作の動機が述べられ、「後論」において茶が好む故に茶を知り、うまく煮て、適切な具合のときに茗飲することで「茶事を尽くす」ことができ、「主は賢にして賓は愚」という事態をさけることができると強調されている。それ以外の十章においては、茶葉を摘むときに他のものが混じったりする弊害、茶葉の優劣の見極め、良い茶が出ない原因がどこにあるのかを指摘している。蘇軾はこの書を「『品茶要録』十篇は、委屈微妙にして、皆陸鴻漸以来の茶を論ずる者の未だ及ばざる所なり。至静にして求むる無く、虚中して留まらざるものに非ざれば、烏ぞ能く物を察するの情、其の詳らかなるが如からんや」⁵⁰⁾と高く評価している。しかしこの書は茶について細やかに論じているものの、四庫全書総目提要に評価されているように、その内容は「茶の采制烹試を以て、各おの其の法有り、低昂得失は、其の微なるを辨ずる所なり」⁵¹⁾だけであった。書名にある「品茶」は、茶の「采制烹試」（摘み、精製と点て方）及び選別という意味であり、後世における飲茶の環境作り、茶侶（ともに茶を楽しむ人）の選択、茶を味わうといった「品茶」ではない。最初にでてきた「品茶」という名前が冠された文献は、ただ「茶葉」の選別を述べているだけで、具体的な「茗飲」の内容や「茶」の味わいに関しては言及していないといえる。ただ、この文献は古代での影響が大きく、明代に至っても程百二の『品茶要録補』が出て、「宋の黄道輔所輯」に欠けている内容が増補されている⁵²⁾。しかし『品茶要録補』は基本的に茶文化史及び伝説の雑談記録に属し、所謂「品茶」とは意味が相容れない。華淑が『品茶八要』⁵³⁾を撰述した時に至って初めて、後世の所謂「品茶」に相応する内容が出てきたのである。『品茶八要』の内容は全文が三百字余りととても短く、「一人品、二品泉、三烹点、四茶器、五試茶、六茶候、七茶侶、八茶勛」に分けられている。具体的には、「人品」は「人の品格」ということで、茶人として求められる人柄、「品泉」は茶を煮る

時の水に対する要求、「烹点」はもちろん茶を煮る時の湯を沸かす心得、「茶器」は用いる器に対する追求、「試茶」は如何にして茶の真の味を味わうか、「茶候」は品茶にどのような環境が必要かを述べ、「茶侶」は一緒に茶を品する人の素質や学識的な要求、「茶勛」は茶を飲むことによる効能をさしている。これらは飲茶に求められるほぼ全ての要素を含んでいる。このため、この文献の内容は短い、明代茶文化がここに至るまで発展し、飲茶の文化的要求は徐々に完成され、我々が現在理解している「品茶」がもつ諸要素をしっかりとそなえていることがわかる。ただしここで注意しなければいけないのは、ここでの「品茶」がもう黄儒の言う「茶葉」の鑑賞、選別ではなく、「茶の湯」及び茗飲の人、環境、技芸の追求に重きがおかれ、茶葉そのものについて述べられることはなかったということである。また、この文献において示される「品茶」に関する追求の様々な要素は、実は、明代初期に既に現れていたことを認識すべきである。

明代初期、明の太祖朱元璋の第十七子、寧王朱権が著した『茶譜』において、「品茶」を条目として記述された章がある。

品茶：谷雨の前に於いて、一槍一葉なる者を採りて之を制して末と為し、膏を得て餅を為すこと無く、雑うるに諸香を以てし、其の自然の性を失い、其の真味を奪う。大抵の味は清甘にして香り、久しくして回味あり、能く爽神なる者を上と為す。独り山東の蒙山の石蘚茶のみ味は仙品に入り、凡卉を入れず。世は固より茶を無くすべからずと雖も、然れども茶の性は涼なれば、疾有る者は宜しく多食すべからず⁵⁴⁾。

これは『茶譜』の「品茶」に関する一節の全ての内容である。ここでの「品茶」とは、どんな茶葉を摘めばいいのか、飲む時に注意すべきこと、飲んだ後にどのような感じが良い茶であるのか、良い茶の産地はどこか、たくさん飲んではいけない人、といったことであり、簡単な茶葉の知識と飲む時の注意事項に過ぎない。後世で一般的に理解される「品茶」とは全く異なる。もしもこの文献がこれだけなら、あまり価値がないと言わざるを得ない。しかし大切なのは、『茶譜』において、「品茶」の一節以外に、「收茶」、「点茶」、「茶炉」、「茶灶」、「茶磨」、「茶碾」、「茶羅」、「茶架」、「茶匙」、「茶筴」、「茶瓿」、「茶瓶」、「煎茶法」、「品水」等の茶に関する器や道具、茶の入れ方、そして水の等級までが具体的に論じられていることである。さらに大事なのは、朱権が、序文の後の第一節「茶譜」の中で、客の素養として求められること、茶を飲むときの主客の礼儀、作法、心遣い、まだ飲んだ後に「話は久し、情けは流し」、「或は庚歌し、或は鼓琴し、或は弈棋し、形物の外に寄り、世と相忘る、斯れ則ち茶の物為ることを知れば、神と謂うべし」⁵⁵⁾などを唱え、よって、品茶には茶を知る人が必要で、所謂「茶を啜りて大いに白丁を忌む」ということを指摘していることである。こうした内容が「品茶」の内包を構成する大事な要素となったのである。朱権は当時まだ茶と関係する要素全てを「品茶」の範疇の中に入れておらず、かえって彼が述べた「茶

譜」の章が後世の「品茶」の内包を具えていたことは明らかである。『茶譜』は茶の文献として先人を受け継ぎ、後世を切り拓き、明代の茗飲という新たな風を起こしたのである。よって彼は、「新たに改易することを崇びて、自ら一家を成す」ために自分が「茶譜」を著したと、自信を持って表明している。『茶譜』が明代の茗飲文化を切り拓く意義を持ったといわれるのは、主として、朱権によって宋代の団茶⁵⁶⁾が「雑うるに諸香を以てし、飾るに金彩を以てすれば、其の真味を奪う無きことあらず」⁵⁷⁾という問題が指摘され、「天地生物、各おの其の性を遂げること、葉茶莫きが若し」⁵⁸⁾と主張し、明代に葉茶政策を行った真意がどこにあるのかを示したからである。まさに茶の「真味」に対する追求を源として、明代中後期の茶人達の中に次第に真の「品茶」を求める茗飲の気風が生まれたのである。このため、上述した「品茶八要」及びその直接の由来である陸樹声『茶寮記—煮茶七類』⁵⁹⁾等、全てこれを始まりとして明代茶人の茗飲美の追究が発展したといえよう。

以上の「品茶」概念の移り変わりから、古代中国の「品茶」に関する考えがおおよそ把握できた。北宋ではまだ「茶葉」自体の鑑別に過ぎなかったものが、明末に到って飲茶に必要とされる茶事全般の要素に発展した。「品茶」というものは、元来良い茶葉を味わうという物質的意義だけに重きを置かれていたのが、茶品、水品、人品、技芸（点茶、候湯等）、環境という総合的な茗飲の美の追究へと昇華し、それによって、古代の飲茶文化は次第に物質的なレベルを超えて、豊かな精神性を備えるに至ったのである。こうした発展の指標となったのが、明代後期に現れた『品茶八要』という短い文献である。もし宋の黄儒の『品茶要録』が、「一物の理を尽くす」ことにおいて「道に進んだ」のならば、明の華淑の『品茶八要』は既に「その道を全う」へと到達し、「品茶」をひとつの範疇的概念として、中国茶文化の中に確立せしめたのである。

上述した「品茶」概念の発展過程に複雑さと比べると、「品茗」という表現の出現と関連文献は不十分で曖昧である。結論をいうと、「品茗」の用例は、唐から清までの茶文化関連文献にはほとんど存在しない。それは単に、中国茶文化が一種の美意識をもった消費文化として、時代の発展とともに、その消費の主体であった文人や士大夫たちが創った文学的な文獻の中に初めて登場する新しい「品茶」を表現する別の言い方に過ぎなかった。筆者が今のところ調べられる文献でいうと、最初に出てきたのは明代末期になる。

明末閩派の代表的詩人である謝肇淛が、博物誌的な『西吳枝乘』という文獻の中で、初めて「品茗」という表現を使っている。即ち「余、嘗て品茗に、武夷・虎丘を以て第一とするは、淡くして遠なればなり。松夢龍井、之に次ぐは、香しくして艶なればなり。天池又た之に次ぐは、常なれども厭らざればなり」⁶⁰⁾である。これ以外にも、施紹莘の『花影集』にも同様の用例がある。「生涯を屈指するに、詞を填め句を問い、品茗し評香し、兄を叫び你を呼ぶ。暇あれば則ち囲碁するは、亦た尤も賢なるのみ」⁶¹⁾（『醉蓬萊・祝彦容九月初度』）そして清代に至ると、こうした用例は文学的な文獻において多く見られるようになった。他にも、札記、隨筆、旅行記、詩の名前、詩句の中に「品茗」の語がよく見られる。例えば、華

岩の『貝果堂に贈る』には「晴昼なれば則ち襟を披きて吟笑し、朗夕なれば則ち泉を煮て品茗し、陶陶容与たれば、何ぞ其れ快からんや」⁶²⁾ (『離垢集』参照)。宝鑿の『晨起喜雪用岑嘉州和王颋外二韵』には「早朝、輩の寒きを冒して帰ることを幾うに、月は落ち鳥は蹄き素輝を閃かす。碧玉颋香宜しく品茗すべく、翠雲、冷を裘し添衣を笑う」⁶³⁾ (『文靖公遺集』参照)。兪樾『湖楼山館雜詩』では「……余、毎に山に遊ぶに、龍井より九溪十八澗を歩くことにして理安に至りて小憩し、又た虎跑に至り品茗して還ること、癸酉の年より始めて、幾ど游例を成す」⁶⁴⁾ (『春在堂詩編』参照)。范祖述『杭俗遺風』には「吳山の茶室、正に錢江に対し、各廟房頭、後は湖水に臨み、仰觀俯察すれば、勝景は窮まり無し。下雪初晴の候、或は茶室の内に品茗し、或は房頭の中に飲酒すれば、童に身を琉璃世界に置くのみならず」⁶⁵⁾と記載されている。黄遵憲『日本国志』には「武将健卒は皆な賞花品茗して自ら風流を命じ、游冶の事は、一も具わらざる無し」⁶⁶⁾とある。また慵訥居士の筆記小説『咫聞録』に「陳幾与先生、西廊に次坐し、品茗して納涼す」⁶⁷⁾、吳趸人『二十年目睹之怪現狀』の第五十回に「我ら、炬を囲み品茗し、此の長夜を消さん……」⁶⁸⁾、劉鶚『老殘遊記』卷九の表題は「一客、詩を吟じ負手面壁す。三人、品茗して促膝談心す」⁶⁹⁾などがある。このように清代の文学的文献の随所に「品茗」の用例が見られる。

上述した「品茗」の用例によって、次のような結論が得られる。「品茗」という語は、明末以来、文人達の文学的用語として出現し、特に清代からは徐々に広く使われ始めた。茶を飲むことの別称となり、文学的意味合いが強まって、いろいろな小説、詩文、隨筆、讀書感、地方誌などの文献に現れたが、基本的には茶の文献で使われる概念ではなかった。しかし注意すべきは、清代になっても「品茶」という表現がまだ広く使われていたということである。同じ人物が同時にこの二種の表現を使っているのである。例えば先述した慵訥居士は「遊幕、粵に來れども賦閑して待聘する者は、余之を邀えて同行して茶樓に登りて品茶せん」⁷⁰⁾ (『咫聞録』卷十)のように、同一文献の中で「品茶」と「品茗」の両方を使っている。ここでの「茶樓品茶」と上の「品茗納涼」は同じ意味である。清代には茶を飲むことについて「品茶」と「品茗」の二つの表現があり、これは、唐代に「啜茶」と「茗飲」が同じように茶を飲むこととして使われていたのと似ている。

しかし、ここで我々は「品茶」と「品茗」の違いに気をつけなければならない。茶文化史において、「品茶」は一種の範疇として明代に確立されたが、また一方で、清代には名詞として茶を飲む意味だけで使われていることもあるのである。これに対して、基本的に文学作品においてのみ出てくる「品茗」は、もしそれを必ず茶文化に帰属させる概念としなければならないならば、「品茶」のように範疇としての意義を持つものと比べて、ただ名詞的な概念にすぎない。それは清代に至って元々の所謂「啜茶」や「茗飲」という表現に取って代わられ、文学性の比較的強い文献の中で「茶を飲む」こととして使われただけである。「品茗」の概念が具体的に内包する豊かな審美的内容は、人々が慣れ親しみ、範疇的意義を持ち、明代に確立された「品茶」と結びつけて考えたときに、初めて十分に理解できるのであ

る。中国では現在、飲茶や喝茶を「品茗」や「品茶」と同じ意味で使っているが、こうした習慣は清代に始まったと言える。いずれにせよ、中国茶文化史において、ふたつの概念が全く同じであるとは限らないという歴史的事実を、明確にしておかなければならない。

結び：「茗飲」から「品茗」へ

以上の整理と考察を通して、中国における茶の飲用に関する理解が少しでも深まったであろう。これら飲茶の諸概念を調べることで、中国古代における茶文化の発展の道筋がある程度把握することが出来ると思う。すなわち、最も早く現れたのは「茗飲」であり、唐代には「啜茶」「茶飲」が見られたが依然として「茗飲」は使われていた。宋代になって「茶飲」は少なくなり、「飲茶」が使われた。「啜茶」は茶の文献中にはあまり見られなかったが、文学作品においては使われていた。それに取って代わったのが「品茶」であり、最初は「品茶」を名前に冠した文献として登場した。明代に入り、「品茶」は広く使われ、茶文献以外に文学性の強い文献にも多く使われた。また、宋代に茶葉の優劣を判断する場合のみ使われていた「品茶」は、明代では飲茶に必要とされる様々な文化的要素が全て入り、茶文化の範疇的概念として確立した。こうした現象の出現と明代に茶の「真味を味わう（品真）」という審美的追求が現れたのは直接的な関係がある。しかし、明末にまた新しい単語が現れた。それは「品茗」で茶を飲むことを表し、清代に「品茗」が文学的文献の中で普遍的に使われることに繋がった。ただ、この表現は文学的文献の中だけに留まっていたようで、人物伝記、地方誌、随筆、札記、旅行記、詩句において見られるものの、清代の茶文献にいたるまでは基本的に「品茗」は使われず、従来の「品茶」が使われていた。清代には、「品茶」はもともと持っていた範疇的概念の他に、「品茗」と同様に茶を飲むだけの意味も表すようになり、その名詞としての概念は文学作品の中にも出現した。「品茗」は単に狭義の「品茶」の別称ともいえるが、また飲茶の文学的表現に属するともいえる。そこに内在する意義は、ただ茶の品質や一般的な飲茶の意味だけを持っていることであり、それは茶葉、茶の湯、環境、茶侶といった要素の追求とは基本的に無関係である。このため、「品茗」と広義の「品茶」、即ち飲茶の総合的要素を追求する「品茶」と結びつけることで、初めて豊かな内実を持つことができる。この内実によって、我々は更に茶文化が中国において「品茗」という段階まで発展し、人間の主体的な存在が強まり、茶の物質的審美の中で、更に豊かな精神的核と本質を備えたことを知ることができたのである。

本稿は中国・国家社会科学基金重大項目「日本朱子学文献編纂与演变」（プログラム番号：17ZDA012）における一成果である。

註

- 1) 沈冬梅：《茶经校注》、中国农业出版社、2006年、1頁。

(原文：“茶者……其字、或从草、或从木、或草木并。从草当作‘茶’、其字出《开元文字音义》；从木、当作‘檟’、其字出自《本草》；草木并、作‘荼’、其字出自《尔雅》。)

“其名、一曰茶、二曰檟、三曰葍、四曰茗、五曰舜。周公云：‘檟、苦荼。’扬执戟云：‘蜀西南人谓茶曰葍。’郭弘农云：‘早取为茶、晚取为茗、或一曰舜耳。’”

- 2) ここで所謂「茶」の別名は、“茶”の雅号ではなく、或いは別称でもない、「茶」的雅号、別称について、中国茶文化史上多く見られる。例えば、唐代だけでも“露芽”、“水厄”などがある。そして宋代陶穀《茗苑录》には、茶の別称、雅号を、“玉蟬膏”、“清风树”、“清风使”、“森伯”、“水豹囊”、“不夜侯”、“冷面草”、“苦口师”等が挙げられている。
- 3) 原文：“今茶字古作荼……至唐陆羽著《茶经》、始减一画作‘茶’。”
- 4) 沈冬梅：《茶经校注》、中国农业出版社、2006年、61頁。
- 5) 同上、9頁。
- 6) 朱自振、沈冬梅、増勤編著：《中国古代茶书集成》、上海文化出版社、2010年、159頁。
(原文：“惟自陆羽《茶经》、卢仝《茶歌》、赵赞茶禁以后、则遂易茶为茶。”)
- 7) 【唐】陆玕 撰：《毛诗草木鸟兽虫鱼疏》明刊唐宋丛书本 卷上。
(原文：“椒树似茱萸……蜀人作茶、吴人作茗、皆合煮其叶以为香。”)
- 8) 【晋】陈寿 撰：【宋】裴松之 注、《三国志》、中华书局、2006年、2014年重印、863頁。
(原文：“曜素饮酒不过二升、初见礼异时、常为裁减、或密赐茶笋以当酒。”)
- 9) 沈冬梅：《茶经校注》、中国农业出版社、2006年、46頁。
(原文：“《神异记》：余姚人虞洪入山採茗、遇一道士、牵三青牛、引洪至瀑布山曰：‘吾、丹丘子也。闻子善具饮、常思见惠。山中有大茗、可以相给。祈子他日有瓊栖之余、乞相遗也。’因立奠祀、后常令家人入山、获大茗焉。”)
- 10) 同上、47頁。
(原文：“《续搜神记》：晋武帝世、宣城人秦精、常入武昌山採茗。遇一毛人、长丈余、引精至山下、示以丛茗而去。俄而复还、乃探怀中橘以遗精。精怖、负茗而归。”)
- 11) 沈冬梅：《茶经校注》、中国农业出版社、2006年、45頁。
(原文：“《神农食经》：茶茗久服、令人有力、悦志。”)
- 12) 同上、48頁。
(原文：“《宋录》：新安王子鸾、豫章王子尚诣县济道人于八公山、道人设茶茗、子尚味之曰：‘此甘露也、何言茶茗。’) ”)
- 13) 同上、50頁。
(原文：“《夷陵图经》：‘黄牛、荆门、女观、望州等山、茶茗出焉。’) ”)
- 14) 同上。
(原文：“《茶陵图经》云：‘茶陵者、所谓陵谷生茶茗焉。’) ”)
- 15) 同上、47頁。
(原文：“《世说》：‘任瞻、字育长、少时有令名、自过江失志。既下饮、问人云：‘此为茶？为茗？’觉人有怪色、乃自申明云：‘向问饮为热为冷。’) ”)
- 16) 朱自振、沈冬梅、増勤編著：《中国古代茶书集成》、上海文化出版社、2010年、68頁。
(原文：“茶……百草之首、万木之花。贵之取蕊、重之摘芽。呼之茗草、号之作茶。”)
- 17) 古代中国においては、茶を飲む行為に関してもう一つの表現が見られる。それは“吃茶”(茶を食べる)という独特な言い方をする。この表現は、趙州禪僧“吃茶去”という偈語で有名である。主に禪門で流行った用語のようで、あまりに独特な表現のため、拙文には敢えて扱わないこ

とにする。

- 18) 朱自振、沈冬梅、増勤編著：《中国古代茶书集成》、上海文化出版社、2010年、3-86頁。
- 19) 沈冬梅：《茶经校注》、中国农业出版社、2006年12月、36頁。
(原文：“啜半而味寡”；“啜苦咽甘、茶也。”)
- 20) 同上。
(原文：“如冷、则精英随气而竭、饮啜不消亦然矣。”)
- 21) 朱自振、沈冬梅、増勤編著：《中国古代茶书集成》、上海文化出版社、2010年、81頁。
(原文：“湘人以四月摘杨桐草、掏其汁拌米而蒸、犹蒸靡之类、必啜此茶、乃其风也。尤宜暑月饮之”)
- 22) 同上、90頁。
(原文：“煮茶啜之、可以涤滞思而起清风”)
- 23) 【宋】赵佶：《大观茶论》、沈冬梅、李涪編著、中华书局、2013年、7頁。
(原文：“啜英咀华、较篋箭之精、争鉴裁之妙”)
- 24) 朱自振、沈冬梅、増勤編著：《中国古代茶书集成》、上海文化出版社、2010年、174頁。
- 25) 【宋】王安石：《临川集》、四部丛刊景明嘉靖本 卷第三十二。
(原文：“碧月团团堕九天、封题寄与洛中仙。石楼试水宜频啜、金谷看花莫漫煎”)
- 26) 【宋】朱熹：《晦庵先生朱文公文集》、四部丛刊景明嘉靖本 卷第六。
(原文：“携藜北岭西、采撷供茗饮。一啜夜窗寒、跣趺谢衾枕”)
- 27) 朱自振、沈冬梅、増勤編著：《中国古代茶书集成》、上海文化出版社、2010年、222頁。
(原文：“茶入口、先灌溉、须徐啜。俟甘津潮舌、则得真味、杂他果、则香味俱夺。”)
- 28) 【宋】杨万里：《诚斋集》四部丛刊景宋写本 卷第十七。
(原文：“老夫七碗病未能、一啜犹堪坐秋夕”)
- 29) 【宋】梅尧臣：《宛陵先生集》、四部丛刊景明万历梅氏祠堂本 卷第二。
(原文：“一啜同醉翁、思君聊引领”)
- 30) 【唐】颜真卿 撰、《颜鲁公文集》、四部丛刊景明本 卷十二。
- 31) 【唐】释灵澈：《唐四僧诗》、清文渊阁四库全书本·卷六、常达诗。
(原文：“啜茶思好水、对月数诸峰”)
- 32) 《二程文集》、《渭南文集》、《苏文忠公全集》、《资治通鉴》、《晦菴集》等参照。
- 33) 朱自振、沈冬梅、増勤編著：《中国古代茶书集成》、上海、上海文化出版社、2010年、182頁。
(原文：“然而啜茶、大忌白丁、故山谷曰：‘茗茶须是吃茶人。’) ”)
- 34) 同上、198頁。
(原文：“国尝饮泉觉爽、啜茶忘暄、谓非膏粱纨绮可语”)
- 35) 朱自振、沈冬梅、増勤編著：《中国古代茶书集成》、上海、上海文化出版社、2010年、201頁。
(原文：“饮之者一吸而尽、不暇辨味、俗莫甚焉。”)
- 36) 【南北朝】刘敬叔 撰：《異苑》、清の嘉慶学津討原本 卷七。刘敬叔は彭城人という、その生年は明らかではなく、“敬叔”は字である。宋の明帝泰始年間に亡くなり、およそ紀元468年前後である。これにより推測すると、《異苑》は楊銜之の《洛陽珈藍記》(547年成書)より早い。
(原文：“剡县陈务妻、少与二子寡居、好饮茶茗。宅中先有古塚、每日作茗饮、先輒祀之。”)
- 37) この本の成立は紀元547年頃だが、すでに散逸しており、現存するなかで最古のものは宋代の刻本である。故に、原文は宋の人によって改定され、その原文に“茗飲”という表現があるかどうかは知りかねない。この文献に関する記載は明代の高元濬《茶乘》、陳繼儒《茶董補》及び刘

源長が編集した《茶史》、陸廷燦が採録した《続茶經》などに見られる。

(原文：“刘縞慕王肃之风、专习茗飲。”)

- 38) 《茶經》の中で、ここでの原文の引用は“聞子善具飲、常思見惠”となっているが。《顧渚山記》には“茗飲”と書いてある、文面から判断すれば、ここには“茗飲”なら文意を通じるが、“具飲”だとすると、意味が分からなくなる。

(原文：“欲煮茗飲、先灸令赤色”；“聞子善茗飲、常思惠”)

- 39) 朱自振、沈冬梅、増勤編著：《中国古代茶书集成》、上海、上海文化出版社、2010年、94頁。

(原文：“昔郦元善于《水经》、而未尝知茶；王肃癖于茗飲、而言不及水表、是二美吾无愧焉。”)

- 40) 同上、124頁。

(原文：“荐绅之士、韦布之流、沐浴膏泽、薰陶德化、咸以雅尚相推、从事茗飲。”)

- 41) 同上、159頁。

(原文：“周诗记苦茶、茗飲出近世。”)

- 42) 同上、192頁。

(原文：“厥后茗飲之风行于中外、而回紇亦以马易茶、由宋迄今、大为边助、则羽之功、固在万世、仕不仕、奚足论也！”)

- 43) 【明】高元濬 辑：《茶乘》、明天启刻本 卷四文苑。

(原文：“好茗飲莼羹”；“高情属吾党、茗飲安可忘。”)

- 44) 原文：“南人以为茗飲”；“采叶可为茗飲”

- 45) 【清】刘源长 辑：《茶史》序1：“世に茶之名を称するには、晋宋以降に起る。而して《神農食經》、周公《爾雅》已に先じて之を及ぶ。……得て茗飲と為す。”(朱自振、沈冬梅、増勤編著：《中国古代茶书集成》を参照)。

- 46) 【唐】陆龟蒙 撰：《甫里集》、四部丛刊景黄丕烈校明钞本 卷之二十。

(原文：“以高士召不至、躬自舂鍤品茶評水、不與流俗交……”)

- 47) 【清】張玉書《佩文韻府》(御定佩文韻府卷九十八之四)の記載には：“陸龜蒙は《品茶》一書を作りて《茶經》の後を継ぐ……”と。然してこの書はすでに散逸したので、その内容は分からない。程百二編《品茶要録補》中にある《升庵先生集》からの引用には：“龜蒙茶園を顧渚山の下に置き、歳に租茶を取り、自ら品第を判す。”と。この内容からすれば、その主な内容は茶の品質の優劣を鑑定、選別することであろう。茶の湯を吟味する内容があるかどうかははっきりしない。

- 48) 【宋】晁以道 撰：《嵩山文集》、四部丛刊续编景旧钞本 卷四。

(原文：“尚喜屋山阿、双泉如鸣琴。远明桑苎翁、品茶疑未湛……”)

- 49) 【宋】陈岩 撰：《九华诗集》、民国宋人集本。

(原文：“缓火烘来活水煎、山头卓锡取清泉。品茶嫩检茶经看、舌本无非有味禅。”)

- 50) 朱自振、沈冬梅、増勤編著：《中国古代茶书集成》、上海、上海文化出版社、2010年、114頁。

(原文：“《品茶要録》十篇、委屈微妙、皆陆鸿渐以来论茶者所未及。非至静无求、虚中不留、乌能察物之情如其详哉！”)

- 51) 原文：“以茶之采制烹试、各有其法、低昂得失、所辨其微。”

- 52) 同上、418頁。黄道輔即黄儒。

- 53) この文献は華淑が陸樹声《茶寮記・煮茶七類》に基づいて補足、編集したもの。拙文では張瑋が華淑《閑情小品・品茶八要》を底本に《茶寮記》原文から校訂したテキストを採用する。ただ、《煮茶七類》は陸樹声の著ではなく、徐渭の作であるとする説もあるが、徐渭はこれを唐の盧仝

の作とする説明があり、実際には、この文献が一体誰の手によるものなのか、歴史的にははっきりしない。

- 54) 朱自振、沈冬梅、増勤編著：《中国古代茶书集成》、上海、上海文化出版社、2010年、182頁。
(原文：品茶：“于谷雨前、采一枪一叶者制之为末、无得膏为饼、杂以诸香、失其自然之性、夺其真味；大抵味清甘而香、久而回味、能爽神者为上。独山东蒙山石藓茶味入仙品、不入凡卉。虽世固不可无茶、然茶性凉、有疾者不宜多食。”)
- 55) 原文：“话久情长”；“或庚歌、或鼓琴、或弈棋、寄形物外、与世相忘、斯则知茶之为物、可谓神矣。”
- 56) 宋代の主な茶の製法、茶葉の香辛料に混ぜて餅状に固めたものを「团茶」という。中には「小龍团」と「大龍团」は最も有名なのである。
- 57) 原文：“杂以诸香、饰以金彩、不无夺其真味。”
- 58) 原文：“天地生物、各遂其性、若莫叶茶。”
- 59) 《煮茶七類》の作者は誰なのかいまだはっきりしていない。
- 60) この内容に関する記載は、清代の汪灝らが編纂した『広群芳譜』（1708年）及び陸廷燦の『続茶経』（1734年）などでの引用が見られる。
(原文：“余尝品茗、以武夷、虎丘第一、淡而远也。松萝龙井次之、香而艳也。天池又次之、常而不厌也。”)
- 61) 原文：“屈指生涯、填词问句、品茗评香、叫兄呼你。暇则围碁、亦尤贤乎已。”
- 62) 【清】华岩 撰：《离垢集》、清道光十五年华时中刻本 卷二。
(原文：“晴昼则披襟吟笑、朗夕则煮泉品茗、陶陶容与、何其快乎！”)
- 63) 【清】宝鋆 撰：《文靖公遗集》清光绪四十三年羊城刻本 卷十。
(原文：“早朝几辈冒寒归、月落乌蹄闪素辉。碧玉瓯香宜品茗、翠云裘冷笑添衣。”)
- 64) 【清】俞樾 撰：《春在堂诗编》、清光绪二十五年刻春在堂全书本 甲丙编。
(原文：“……余每游山、自龙井走九溪十八涧而至理安小憩、又至虎跑品茗而还、自癸酉年始、几成游例矣。”)
- 65) 【清】范祖述 著：《杭俗遗风》、上海文艺出版社、1989年、25頁。
(原文：“吴山茶室、正对钱江、各庙房头、后临湖水、仰观俯察、胜景无穷。下雪初晴之候、或品茗于茶室之内、或饮酒于房头之中、不啻置身琉璃世界矣。”)
- 66) 【清】黄遵宪 撰：《日本国志》、上海古籍出版社、2001年、38頁。
(原文：“武将健卒皆赏花品茗自命风流、游冶之事、无一不具。”)
- 67) 【清】慵讷居士 撰：《咫闻录》、清道光二十三年刻本 卷四。
(原文：“陈几与先生次坐西廊、品茗纳凉。”)
- 68) 【清】吴研人 著：《二十年目睹之怪现状》(上)、人民文学出版社、2000年、455頁。
(原文：“我们围炉品茗、消此长夜……”)
- 69) 【清】刘鹗 著：《老残游记》、浙江古籍出版社、2010年、2012年重印、48頁。
(原文：“一客吟诗负手面壁 三人品茗促膝谈心。”)
- 70) 【清】慵讷居士 撰：《咫闻录》、清道光二十三年刻本 卷十。
(原文：“遊幕来粵赋闲待聘者余邀之同行登茶楼品茶。”)